

ジツド研究の周辺

浜田明

I

アンドレ・ジツドは、もはや「今日の」作家または「昨日の」作家ではなく、すでに過去の作家である。

それは彼が、世を去った一九五一年から今日までほぼ十五年を経ているということ——あるいは、彼が事実上創作活動を終えた一九三〇年代からすれば、今日まですでに四半世紀を経ているということ——のほかに、あるいはそれとともに、彼の文学を支えていた基本的要素が時代の推移とともに、すでに過去のものとなったということである。つまり、彼の時代における作家の文学態度、文学史的にみた批評理論、およびその背景となる思想風土などが、大きく移行してきたということである。

チボーデ流の世代論からいえば、ジツドの世代——彼が生れた一八六九年に前後して生れたクローデル、ブルースト、ヴァレリ、そしてチボーデ自身の世代——は、それに続

くすでにいくつかの世代の層によって、文学的思想的に新しい要素を積み重ねられ、「現代性」から遠ざかり、過去のものとなったのである。

しかし、ここでジツドの文学を過去のものとして規定することは、それを否定することではもちろんない。逆に、過去のものとして規定することにより、それを歴史のなかに定着させ、その客観的意味を明らかにすることなのである。

たしかに、ジツドの文学はわれわれにとってその「現代性」を否定させ難くする要素をもっている。それは、ひとつには彼の文学がまだ今日まで「生きた」影響を与えているということ、つまり時代的にわれわれと完全に断絶していないということである。それはまた、彼の文学の基盤となっていた風土が今日もまだたしかに存続しているということの意味する。人間の生活態度において「ジツドから学ぶ」というような表現がまだある意味で有効だと考えられるのである。さら

に、いまひとつは、ジツドの文学がその形式において本質的に「現代性」から切り離されない具合のものであるということである。この場合「現代性」というのは、必ずしも時間的なものを意味しているのではなくて、彼の文学の形式がつねに時代と人間との関係——または相剋——そのものにおいて、あるいはそのものにおいてのみ、成立するというきわめて時代批判的なものであったということなのである。だから、ジツドの文学が、作品そのものの芸術的問題として扱われることは稀れであり、「人と作品」、「生活態度と芸術」といった文学にとって本質的な立場から考えられるのがまず普通であった。

しかし、巨視的に歴史の流れを客観的にみれば、彼の「現代性」は、彼の時代の本質的性格であり、その「現代性」そのものが時代特徴としてすでに過去のものとなっているのである。したがって、この「現代性」という言葉は、もはや近代性という言葉に置き換えられなければならないものである。そして、ジツドの文学はその「現代性」により彼の時代の特徴をきわめて正確に反映しており、したがって彼の文学は彼の時代の文学のひとつの典型と考えることができるのである。彼の文学は時代の所産であるとともに、またそれは時代特徴の具体的な表われでもあるのである。彼の文学を過去のものとして規定し、歴史のなかに定着させることは、だから、一方では彼の文学そのものを解明するとともに、他方ではそれにより彼の時代の特徴をも明らかにすることを可能に

するのである。そして、このような立場が有効になるということは、ジツドの文学またはその時代がすでに客観視できうるほどに過去のものとなったということである。

同じ一人の作家も、それを見る者の時代によって、違った具合に見られるということはある意味で当然である。それは、批評家自身の立場は別としても、批評家の時代の相違が対象となる作家に対する見方を変えさせるからである。つまり、作家が時代に規制されているのと同様に、批評家も時代に規制されているのである。

たとえば、フロベールの文学に対するブリユヌチエール、チボーデ、およびサルトルの見方の相違はそのひとつの例となるであろう。ブリユヌチエールの場合、その歴史主義的見方にもかかわらず、同時代人として見るために、作品に対する見方は直接的になりやすい。彼は『フランス自然主義文学』のなかの「フロベール研究」で『ボヴァリ夫人』は、他の全ての功績より前に、その時代に現われる功績をもった、としながらも、小説の内容に関しては、これを表面的形式的な芸術作品として捉え、単に自然主義小説のひとつの典型とみるだけである。彼によれば、『ボヴァリ夫人』の意図は、平凡さと卑俗さそのものを作者自身を介入させることなく活写することにあり、作者自身はせいぜいブルジョアに対する芸術家としての軽蔑がわずかにあるだけであるとし、作品そのものについては、人間を嫌悪し彼らに対する軽蔑に沈潜することは結局すぐれた芸術だとはいえない、と論断してい

る。これに対して、チボーデの見方はことごとくブリュヌチエールの見方に反するといつてよい。彼は、『ボヴァリ夫人』フロベールの定式により、『ボヴァリ夫人』を単なる自然主義文学の芸術作品と見ず、むしろ作者の内面の反映と見るのである。そして、もし公ブルジョア^①に対する作者の軽蔑があるならば、それは作者の自分自身に対する軽蔑であり、またボヴァリ夫人の悲劇は作者自身の悲劇である、と考えるのである。そして、チボーデはその小説に描かれたブルジョアの世界をある程度客観的に捉え、その世界の歴史的推移を自己の文学理論に当て嵌めて批判するのである。彼によれば、その小説の世界はヒューマニズムに支えられた古いブルジョア階級がそれに続く新興のブルジョア階級によつて取つて代わられる時代相を示すものなのである。これは、ある意味で、ひとつの文学に対する批判であると同時に歴史への批判である。そしてこれを可能なものとさせたのは、批評家固有の文学理念は一応別にして、作家と批評家との時代の差であると考えられる。サルトルの場合は、チボーデの場合をさらに客観化させ、理論化させたもののように思われる。彼が問題にするのは、とくに、フロベールの階級意識である。ブリュヌチエールのいう、『ボヴァリ夫人』においてフロベールがおこなつた公ブルジョア^②に対する皮肉・批判・登場人物に対する個人的復讐という言葉は、表面的には、サルトルの表現と似たところがある。しかし、それとサルトルの階級理念を根底にした見方とは本質的に異なるのは当然である。何よ

りも、時代が異り、さらに時代が与える思想背景が異なるのである。

アンドレ・ジッドはフロベールほど古くはない。なによりも彼は今世紀の作家であり。しかも彼の時代の文学風土はある意味でまだ続いている。しかし、ジッド以後の世代によつて積み重ねられた文学の層は必然的に彼を過去の存在へ位置づけることになるのであり、したがつて、彼の文学の捉え方も必然的に変らざるをえないのである。

註(1)ジッドは J. Ecole des femmes (1926), Robert (1929) と

三部作を形成する *Geneviève* (1936) 以後、劇作 *Thésée*

(1946) を除いては創作といえるものをおこなっていない。

(2)チボーデの世代論は一般に考えられるように三〇年を一世代とするのではなく、作家の誕生(または二十歳)の年代においてその時代特徴を示すグループをひとつの世代と考えるものである。

II

アンドレ・ジッドの文学の背景となつた時代、十九世紀末から一九三〇年代までは、一口にいって思想上・文学意識上の変動期である。個人的にはそれは道徳の問題、古い規範と相剋する自我の可能性と不安の時代であり、社会的には十九世紀末からのブルジョア社会の頹廃または衰退および(ゴードマン流にいうならば)資本主義経済の発展とともに深化

する社会構造の変化と人間的価値の失墜の時代である。思想的には十九世紀末の科学万能主義に対する批判として生れた心理主義的傾向あるいは意識現象偏重の時代であり、さらには一九二〇年代以降の社会科学思潮の抬頭の時代である。政治的には一八七〇年の普仏戦争とそれに続くパリ・コミューヌ、さらに一九一四年の第一次世界大戦とその戦後期および一九三〇年代の世界的経済不況など、外的にも社会生活を大きく転換させた変動期である。

ジッドが事実上主宰したN・R・F誌派に属するすぐれた批評家B・クレミューが、その『不安と再建』のなかで、「ひとつの転換期⁽¹⁾」として捉え、「疑惑と不安とそれに続く否定の文学⁽²⁾」の時代と規定したのは一九一八年から一九三〇年までのこの時代であり、またM・ティゾン⁽³⁾ブロン女史が「ヒューマニズムの危機」として見るのもこの時期である。

この時期においては既成の秩序が告発され、破壊され、「不安」のなかで新しい人間形式が求められたのである。ティゾン⁽³⁾ブロン女史が「ヒューマニズムの危機」というのは、このような既成の秩序の否定から新しい秩序が生れてくる変動期の状態を示したものである。

ジッドはこのような時代相をあらゆる面において生きた作家である。彼は個人的には既成の秩序または道徳に対して自我を戦わせ、社会思想的には『コンゴ紀行』により植民地政策を告発し、また『ソヴェエト紀行』により社会主義への接近を示し、文学的には形式上のいくつかの新しい試みをお

こなっている。しかし、彼のつねに中心となる問題は個人と社会との相剋に関するものであり、文学のテーマも根本的にこの問題に関するものである。そして、このことが正にジッドの「現代性」であり、またそれが彼の時代の特徴的の性格でもあるのである。

したがって、ジッドの文学に対する批評もつねにこの点が問題とされてきたのである。しかしながら、それもやはり批評家あるいは研究者の時代により問題の捉え方が異ってきたことは認めねばならない。

われわれは、ジッドの同時代の批評家、ジッドの死後——一九五〇年代——の批評家、そして今日の批評家の、それぞれの見方の差違を明らかに認めることができる。それは、ジッドの文学ないし人間を捉える面が異るとともに、方法そのものも異なるのである。

ジッド研究は、一九三〇年代、一九五〇年代そして今日と、三つの時期を画することができるが、それについて以下簡単に述べることにする。

ジッド研究は一九三〇年以前にも見えているが、本格的に行われ始めたのは一九三〇年代に入ってからである。この時期においては、ジッドは同時代人として直接的に批評・研究されており、したがって「人間研究」といった傾向のものが多い。そのうちの二・三を挙げると次のものがある。

ラモン・フェルナンデスの『アンドレ・ジッド』(一九三一年) (Ramon Fernandez: André Gide, éd. Corrèa)

エドワール・マルチネの『アンドレ・ジッド、愛と神性』
(一九三二年) (Edouard Martinet; L'Amour et la divi-
nité, éd. Atinger)

レオン・ピエール・カンの『アンドレ・ジッド、人、そ
の生活、その作品』(一九三三年) (Léon Pierre-Quint:
André Gide, sa vie, son oeuvre; éd. Stock) この書は
一九五二年の同名の書の第一部をなすものである。

これらは既してアンドレ・ジッドの「人と作品」という面
から見られたものであり、それがジッド自身あるいは彼の時
代のそのもの特徴的資格であることは一応別にして、何よ
りも作家の人間またはモラルが問題とされているのであり、
作品も作家の大きく考えて道徳意識を扱ったものである。

ラモン・フェルナンデスは、ジッドが事実上主宰したN・
R・F誌派の文学者であるから特にその傾向が強いが、同時
代人として、正確には、ジッドから影響を受けた世代として彼
の内的生活の発展を裏すけている。フェルナンデスはジッド
の生活を「病期と回復期の反復」として捉え、しかもこの病
期と回復期がジッドにおいては一般人とは逆の概念なのであ
り^③、この回復期——一般の概念では病氣——においてジッ
ドの文学生活が行われるとするのである。これはジッドの文
学を説明するとともに彼の時代風土を説明する面を表わして
いるといえる。エドワール・マルチネもジッドの文学をその
生活の中から説明する。彼はジッドにおける愛・宗教・およ
びその特異なモラルと作品との関係を明らかにし、とくにジ

ッドにおけるプロテスタンティズムの問題について述べてい
る。また、ピエール・カンは、ジッド研究において今日もな
お重要視されるその『アンドレ・ジッド、その生活、その作
品』において、上述の批評家よりさらに詳細に以上の問題を
扱っている。彼もジッドの内部から伝記的にその人間像を解
明し、作品そのものも作家の直接の生の問題の表明として扱
われている。たとえば「彼(ジッド)の欲望の非常に特殊な
性質が彼の教育、彼の環境、彼の宗教と相俟って(…)彼の
生涯のすべての劇(drame)をもたらしたのである^④」とし
ている。そして、これがジッドの自我と社会との相剋の問
題、個人主義的ヒューマニズムの問題、それからの脱出への
意図とその不可能性の問題となつて表わされるのである。

ジッドの時代——一九世紀末から一九三〇年代にかけての
時代——は、社会的にもB・クレミューのいうように価値の
転換の時期であり、H・ティゾン・ブロン女史の指摘する^⑤
ように古いヒューマニズムの危機の時期であり既成の秩序へ
の反抗・告発の時期であつた。ジッドはこのような時代に生
活と文学を直結させ、あるいは文学即生活という形式の文学
態度で生きた作家である。したがって、ジッドと同時代の批
評家はまさにこの点において彼の文学を捉え、文学を生の問
題としてアクチュアルに考えたのである。今日からみればこの
態度、方法は、作家も批評家もふくめて、そのこと自体がひ
とつの時代相をあらわしているといえよう。

一九五〇年代のジッド研究はやや様相が変わつてきてい

る。それは時代の差とともに作家に対するある種の角度、または客観性がでてきたことにはかならない、さらに、一九五一年のジツドの死を契機にして出はじめた批評は、彼に対するオマーシュ(献辞)またはエローシュ(讚辞)の立場をも含めて、一応時期を画した彼の文学に対する決算書の意味をもつのである。そして、この時期において特徴的なことはジツドの文学および人間をある意味で科学的に分析、批評しようとしたことである。

一九五二年十二月号の一卷をジツドへのオマーシュに捧げたN・R・F誌、あるいは彼と生前親しかった作家による覚え書き⁽⁹⁾、などを除いて、この期の代表的研究として次のものを挙げるこゝができる。

ブルマ・ルネ・ラングの『アンドレ・ジツドとドイツ思想』
(一九四九年) (Bluma Renée Lang: André Gide et la pensée allemande; éd. Eglolf)

レオン・ピエール・カンの『アンドレ・ジツド』(一九五二年) (Léon Pierre-Quint: André Gide; éd. Stock)
ピエール・ラフィエの『小説家アンドレ・ジツド』(一九五四年) (Pierre Lafille: André Gide romancier; éd. Hachette)

ジャン・ドゥレルの『アンドレ・ジツドの青春』(一九五六
年) (Jean Delay: La Jeunesse d'André Gide; éd. Gal-
limard)

ジャン・シュランベルグの『マドレーヌとジツド』(一

九五六年) (Jean Schlumberger: Madelaine et Gide; éd. Gallimard)

さらに、モノグラフィではないが、一九三五年のガリマール版のジツド全集からそのなかで用いられた用語および固有名詞を詳細に調べ網羅した、ジュスタン・オブリアンの『アンドレ・ジツド全集十五巻の明細インデックス』(一九五四年) (Justin O'Brien: Index détaillé des quinze volumes des oeuvres complètes d'André Gide) も考慮に値するものである。

ルネ・ラング夫人の研究になる『アンドレ・ジツドとドイツ思想』は、とくに『背徳者』(一九〇二年)までの、ジツドの青春期において彼が影響をうけたドイツの思想家との縁関係を研究したものである。ルネ・ラング夫人は、ここで、ジツドの日記にもしばしば言及されているシヨペンハウエル、ゲーテあるいはヘーゲルなどとの思想上の影響を指摘し⁽¹⁰⁾、さらにジツド自身がフランス・サンボリズムから出発したことおよびフランス・サンボリズムとドイツ・ロマン派の思想との関係から、またジツドの初期作品へ直接的影響から、彼とノヴァーリスとの思想関係を明らかにしている。

ピエール・カンの『アンドレ・ジツド』は先述の一九三三年の研究『アンドレ・ジツド、その生活、その作品』にさらに二部三〇〇頁を加えたものであり、内容は「人と作品」の研究であるが、この面においては今日なお定評のあるものである。

ピエール・ラフィューの『小説家アンドレ・ジッド』は、これまで人間研究を主眼にしたジッド批評に対して、はじめて作品そのものを主眼に研究したものととして新しいといえる。ここでラフィューは、作品の発展のなかにみられるジッドの精神的発展とともに、彼における文学—作品—形式の発展をも考え合わせてさらに総合的なジッドの文学をみようとして試みている⁶⁾。

ジャン・ドゥルは『アンドレ・ジッドの青春』において、医学のおよび心理分析的立場から、ジッドの幼年期以来の精神形成の過程を伝記的に研究している。彼はさらに、ジッドの思想形成においては、ルネ・ラング夫人と同様にドイツ思想の影響関係を指摘している。また、友人であったシュラン・ベルジェは、ジッドの個人生活でつねに問題とされる妻マドレーヌとジッドとの関係がある意味でマドレーヌの側に立って論じたものである。ジッドの結婚は愛のないしかしマドレーヌ以外の女性はさらに考えられないというものであったが⁶⁾、その結婚形式が彼の家庭生活の悲劇の原因であり、さらに、そういったジッドの人間関係の形式が彼の文学のひとつの要素となっているのである。シュランベルジェはこの問題の手がかりとなるマドレーヌとジッドとの関係を伝記的に解説を行ったのである。

以上の一九五〇年代の研究は、半面ジッドの人間と文学とを客観的に扱いながら、別の半面で直接的・逸話的にそれらを見たものである。これは、批評家、研究者の世代がジッド

の世代と重なり合っているところからくるのであり、ある意味で当然であろう。しかし最近のジッド研究は、一応ジッドの直接の影響から離れたものであり、上述の一九五〇年代の傾向をさらに強くしたものといえる。とくに、フランス国外での研究が多いのは、国内でのジッドの評価の問題は別としても、興味深いものがある。たとえば次のものが数えられる。

ジャン＝ジャック・チエリの『ジッド』(一九六二年)

(Jean-Jacques Thierry: Gide; éd. Gallimard)

ウォレンス・フォウリの『マンドン・ジッド、その生活と芸術』(一九六五年) (Wallace Fowlier: André Gide, his life and art; éd. The Macmillan Co.)

ヘレン・ワトソン＝ウイリアムズの『マンドン・ジッドとギリシヤ神話』(一九六七年) (Helen Watson-Williams: André Gide and the Greek Myth; éd. Oxford Univ. Press)

ヴィオノ・ロッシの『アンドレ・ジッド』(一九六五年)
(Viono Rossi: André Gide, The Evolution of an Aesthetic; éd. Rutgers Univ. Press)

そのほかマルセル・マルランの監修になる『ジッド研究ゼミナール』という形式で行われたものの報告書 (Entretiens sur André Gide; éd. Mouton & Co.) もある。

チエリの『ジッド』研究は、伝記・作品の解説にも紙数を削きながら、どちらかといえば資料・文献を集めたものであ

り、ひとつの観点に立つ批評ではない。フォウリの『アンドレ・ジッド、その生活と芸術』はこれまでの研究と同じような見方のもののようにあるが、巻末の「ジッドと現代」の章においてやや文学史的意味を加味したところが新らしいといえるかもしれない。また、ワトソン・ウィリアムズはジッドの『ナルシス論』、『鎖を離れたプロメテ』、『パリュード』などの散文またはソチ形式の小説および『エディプ』、『ペルセフォヌ』、『テゼ』などの戯曲におけるジッドの文学におけるギリシア神話のテーマを中心に作品分析を行っている。ロッシも同様に作品研究に主眼を置いていようであるが、彼の場合はジッドのとくに初期作品における美学的発展というテーマであり、『パリュード』（一八九五年）あたりまでの作品の構成を「イマーシユ」を主題にして分析している。

右にのべたこれらの研究はアメリカまたはイギリスといったフランス国外においてなされていること、およびその研究テーマがどちらかというと作品自体の芸術的・美学的問題に向けられていることであり、ジッドの文学が本質的に彼の間から離れて考えられない性質のものであるだけに、偶然の一致とはいえ興味深いものがある。

以上みてきたジッドに対する批評研究の三つの時期したがって三つの特徴は、われわれが新らしくジッドの文学または人間を考えるに当って、それぞれ独自の価値をもつものである。一九三〇年代の批評研究は今日からみて古いものであるがそれは逆に作家そのものに近かったことを意味するので

あり、また後の批評研究は作家の生活のなまなましさを直接的には感取しえないが方法的・時代的に作家との距離を置くことにより見方は客観的になりある意味で科学的になりうるのである。したがって、ジッド研究にとって、三つの時期の三つの特徴——一九三〇年代の人間研究の特徴、一九五〇年代の思想史的・社会的研究の特徴、最近の作品研究の特徴——はそれぞれ総合的把握のひとつの側面として生かされねばならないであろう。

註(1) Benjamin Crémieux: *Inquétude et Reconstruction* éd., Corrèa, 1931 P, 30

(2) *ibid.*, P. 24

(3) Ramon Fernandez: *André Gide*; éd., Corrèa 1931, P.36

(4) Léon Pierre-Quint; *André Gide, sa vie, son oeuvre*; éd., Stock, 1932, P. 41

(5) Micheline Tison-Braun: *La crise de l'humanisme*; 1935, Avant propos.

(6) *たじなび* Jean Cocteau: *Gide vivant*; éd., Amiot-Dumont(1952), Roger Martin Du Gard: *Notes sur André*

Gide; éd., Gallimard (1952) なちを著ちることかびあや。

(7) Bluma Renée Lang: *André Gide et la pensée allemande*; éd., Eglolf (1949) Chapitre IV

(8) これはジッドの文学にとつて特徴的なことであるが、彼の個人生活と文学生活は切り離しがたく結びついており、さらに

彼の作品のジャンルの発展も彼の文学生活の発展と即応して
いるとみることが出来る。彼の行ったジャンルは、劇作は除
いて、いわゆる「ソチ」「レシ」「ロマン」と彼に名づけら
れた形式で順次発展して行くものである。

(9) André Gide; Romans, Récits et Soties, oeuvres
lyriques; éd., Biblioth. de la Pléiade (1958) Pp. 373-374
Immoraliste よりの引用。ただしここではこの「レシ」形式
の小説の主人公ミッシェルをジッドの告白の人物とみてのこ
とである。

III

前に述べたように、ジッドの文学の本質的要素は自我の問
題であり、自我と社会との関係の問題である。それはまた個
人の倫理と社会あるいは宗教の規範との関係の問題であり、
要するに人間の生の問題である。ジッドにおいて「誠実」と
いう言葉が問題になり、トーマス・マンが彼を「人類のモラ
リスト⁽¹⁾」と呼ぶのもこの意味においてである。

しかし、ジッドのこのような問題のあり方そのものは、よ
り大きい視野からみれば、十九世紀末から一九三〇年代にか
けての時代背景から規制されるものであり、ジッド自身その
時代から生みだされたものといえるのである。そのようにし
てみれば、彼の問題は彼の時代の問題でもあり、広く歴史の
問題でもある。したがって、ジッドの文学はまた思想的に
文学史的に扱われねばならない相をもつのである。

さらに、これらの問題が何よりも文学化され——あえてい
うなら芸術化され——ることにより具体化されるのであるか
ら、それらはまた文学作品の——芸術的・美学的——問題と
なるのである。ジッドの場合、作品の形式の問題は、しか
し、決して表面的芸術至上主義として扱われることはもちろ
んなく、作品の形式またはジャンルの創意そのものも深く彼
の人間の問題と関連し合っているのである。したがって、ジ
ッドはあらゆる言葉の意味において深く文学的な人間であ
り、生活と文学とが二つのものでなくて、一つのものになっ
ているのである。そして、このような在り方自体が彼の時代
の特徴でもあるのだ。

このように、ジッドの文学は、人間の問題——社会との関
係における自我または個人倫理の問題——、思想的問題——
文学の背景となる時代思潮と文学史的問題——、および作品
形式の問題——作家の思想の表現方法の問題——、という三
つの面から捉えられることができる。したがって、ジッド研
究の方法もこの三つの面からまず概観して行かねばならな
い。(そして、その後にはじめて研究者の独自の批判が可能
になるのである。しかし、ここでは、そこまで立入って考え
ることはさしひかえたい。)次に、上述の三つの面について簡
単にみて行くことにする。

(1) 個人倫理の問題

ジッドの文学的出発は個人倫理の問題にはじまり、そし

て、後の文学上の発展もこの問題の発展においてなされていく。それは彼自身の内部からみれば自我の問題であり、外部からみれば社会規範と人間の自由との相剋の問題となるのである。

ジツドの自我意識の根源は、まず、彼の「特異な性癖」

——ピエール・カンの言葉で、欲望のひじょうに特殊な性質⁽³⁾——にあり、さらには何よりもそれに対する過剰な意識そのもののなかにある。これらは、後にジツド自身の告白的自伝小説『もし一粒の麦死なずば』および『コリドン』に記されている。しかし、彼の特殊性はそのことにあるよりも、むしろ、一方では、それからうみ出される彼の「Complexe d'infériorité」または宗教的罪の意識と、他方ではその意識を克服しようとする意図との、厳しい葛藤のなかにあるのである。

この自我の内部の矛盾は、人間本来の感性の肯定とそれに対置される異常に純粋な理性とが二極に分離されることによつてなされる。「理性 *raison* はつねに魂 *âme* に対立する⁽⁴⁾」というのが、ジツドの最初の作品『アンドレ・ワルテルの手記』の基本テーマである。彼において、この「理性と感性」との二極対置は、後の作品にもつねに問題となるテーマである。『ナルシス論』においては、この問題は現実から離れた観念のなかでの操作にすぎないが、ジツド自身の成長とともに、これは猶余を与えられぬ現実の問題となるのである。そしてこれを彼におけるさらに本格的な問題にするのはキリ

スト教の「神」に関わる意識である。

彼が幼時からそのなかで育てられた厳しいプロテスタンティズムは彼の自我内部の矛盾をさらに大きくするのである。

ここで、理性と感性とは、プロテスタンティズムのモラルと人間の自由意志との問題に移行する。彼が「あえて自分になる⁽⁵⁾」という言葉を書き記すとき、それは感性を肯定する自己の自由意志を主張しようとするのであり、「肉体は私を苦しめる⁽⁶⁾」と『ワルテル』のなかで告白するとき、それが理性のモラルによって否定される場合を示している。

『地の糧』における自由意志または「悦楽 *volupté*」の追究は、感性と理性とを含めた自然な人間の肯定により、プロテスタンティズムのピュリスムを克服しようとする試みであるが、結局はそれも混然とした夢想の域を出ることとはできなかった。「地の糧」の舞台となるアフリカ旅行で「私の愛するものはすべて神である。神を愛することはすべてを愛することだ⁽⁷⁾」と彼は書くが、ここで彼がいう「神」の意味は何であるにしろ、この観念的な言葉にはいかなる解決も示されていない。何よりも「地の糧」というテーマ自体がすでにキリスト教に属するものである。後に、ジツドは「背徳者」において、もう一度人間の「自由意志」を試みるが、しかし、その後で『狭き門』においてその試みを再び破棄するのである。彼においては、つねにプロテスタンティズムの「神」のモラルと戦いそして破れるという形式が反復されるのである。戯曲『サユール王』において、悪魔の声に誘惑されて遂

に神を敬うタビテに王位を渡すというテーマで、彼はこの形式を見事に表わしている。

しかし、まだこれらはジツドの内部の、いわば觀念の、問題にすぎない。たしかに、これはジツドの文学の基本的形式ではある。しかし、それが現実生活に関わるまでは自己内部の「夢想」にすぎない。そして、彼のこの觀念の世界が現実に関わるのは、彼のマルスリーヌとの結婚、および彼自身の文学の社会化の時からである。

ジツドはマルスリーヌとの結婚において、おそらくはじめで、自我と他者——または社会——との關係を経験したと思われる。したがって、それまで自己内部で觀念的に処理されてきた自我の問題は、はじめて現実の問題となるのである。しかし、青春時代極度に深化された彼の自我意識はすでに彼の生活態度を固定してしまっているのである。

彼の文学的主我主義は、生活においても特異な「ピュリスム」で貫かれている。J・ドゥレ、ピエールカン、J・シュランベルジェが証言する彼と妻との冷い關係はすでに觀念的態度では説明されない。彼とマルスリーヌは「愛のない結婚」⁽⁸⁾によって結び合わされたのであったから、彼は「過去を變えることのないためにまた過去に忠実であるために、日毎に伴りのものとなって行くひとつの自分の姿しか彼女に示さなかつた」⁽⁹⁾のである。「私は彼女の喜びのために何をなしたか。(…)彼女は私からすべてを期待し、そして私はといえれば彼女に関わりを持たないのだ。」⁽¹⁰⁾この言葉は、彼の

マルスリーヌに対するあまりにも厳しい自我またはエゴイズムを示しているが、しかし、問題はその「背徳」を自己内部でとどめることはせず、それを「ひとつの問題として差し出す」⁽¹¹⁾世に問う、彼の文学的生活の社会化にあるのである。

ジツドとマルスリーヌとの關係はそのまま彼と社会との關係に移行するものといつてよい。彼が「大衆を忌む」⁽¹²⁾と書いたとしても、また逆に、彼が後に社会主義に共感を持ったとしても、それはたいした差はないのである。要するに、ジツドの自我は、その情緒と理性とを併せてあらゆるものにおいて、本質的に人間に共調することを拒否するのである。彼は社会の倫理からはある意味で関わりのない位置に自我を存在させているのである。しかし、だからといって、彼の自我は非現実的なものではない。逆に、彼の眞の生活——文学——に関わることに於いてそれは一般の人間の生活意識よりも深く現実に関わっているのである。そして、そのことにより、彼の文学生活は、思想的に、人間の意識の問題に深く関わっているのである。

彼が後に『法王庁の抜け穴』で示す「無償の行為」は彼の自我の問題の極限の理論化であり、ひとつの極めて切実な思想であつたのである。そこにおいて、彼は「神」の問題、「愛」の問題、そして「社会」の問題の解決の一方法を見出したのである。しかし、それでもなお、ジツドは社会的には「虚構」のなかに存在しなければならぬ。それは、極度に文学化さ

れた自我の可能性を許す、彼のブルジョア階級に属する立場によるものであり、また、その立場を可能にした時代によるものである。われわれは、すでに、カミュの『異邦人』におけるムルソーの理由のない殺人を「無償の行為」で説明できないのである。

(2) 思想的発展の問題

ジッドが少年時代から聖書を耽読していたことは彼の自伝的作品『もし一粒の麦死なずば』に述べられている通りである。しかし、そのことは、彼の幼時から家庭内を支配していたキリスト教の宗教的雰囲気をさらに加えて考えたとしても、彼をどれだけキリスト教の信仰へ志向させたかは疑問である。彼にとっては、福音書は旧約聖書とともに、人間の倫理をそこで教える一種の哲学書であったともいえるのである。

彼が聖書の内容を理解する方法はつねに自己の生活をそれに対置させることによつてであり、自己を放棄することによつてではない。聖書の倫理は、あるときは彼の自我を導きあるときは自我を厳しく制約する、無限の圧力だったのであり、そしてそれが彼の「不安^①」の根源だったのである。彼はこの「不安」の意識に対して自我を主張する「倨傲^②」の意識を対置させる。彼は『愛の試み』のなかで「われわれの唯一の目的、それは神である」としながらも、『アンドレ・ワルテルの手記』の主人公に神と戦う姿を夢想させているの

である^③。

ジッドの少年時代のもうひとつの愛読書は「千一夜物語」であった。この物語は、ある意味で聖書と並んで、彼の思想のひとつの方向づけをしたものと思われる。そのなかにある異教の人間肯定の世界は、福音書の倫理に自我を対置させるべき、たしかにジッドの支えとなったものである。『アンドレ・ワルテルの手記』のなかで、彼が福音書の神の言葉に並べてイリアッド、プロメテ、アガメムノンの名を挙げ、さらに「エジプトよ、エジプトよ、汝の不動の神々よ^④」と詠嘆するとき、彼はすでに彼の未来へのひとつの道を示唆しているのである。

聖書の自己規制の倫理と異教の砂漠のなかの「悦楽」の世界とは、彼の後の文学にも絶えず描かれる二つの要素であり、しかも、互いに矛盾のなかで争い合いながら同じ作品のなかで描かれる二つの要素である。

『地の糧』において「悦楽、この言葉、私はそれを絶えず反覆したい。私はそれを幸福 *bien-être* の同義語として反覆したい。あるいは、ただ単に存在 *être* というだけで充分でさえある^⑤」と述べるが、後にまた「神の戒よ、汝は私の魂を苦しめた。私が地上で美なるものとみたすべてのものへの渴望に、新しい罰が約束されているのか^⑥」と告白するのである。『背徳者』においても、この同じ矛盾の形式があり、また『狭き門』においてもキリスト教の倫理に殉ずるアリサと人間の愛を望むジェロームとの二人の人物によって作

者の思想が反映されている。ここでは、アリサの聖書の倫理への献身がテーマとなっているが、それも、「アリサの日記」あるいはジェロームの小説内での説明性の強さにより、否定されているようにもみえるのである。要するに、ジッドの文学はつねに「矛盾の形式」によって成立しており、決定的な唯一の方向は与えられていないし、また与えられ得ないのである。彼は文学を「ひとつの問題として提出する¹⁰¹」というのであるが、彼の文学は彼の人間から分離できない以上、それは作家自身の問題としてつねに彼自身に提出されているのである。

ジッドが文学思想において、とくに『パリュード』以前、フランス・サンボリスムの影響のなかにあったことは一般に認められている。

彼が初期の作品を書きはじめた頃マラルメのサロンへ通ったということは周知のことであり、また後の『マラルメ論』でその詩人の影響について述べている。また彼自身も「私は自分がかぎりなく象徴派であることを知っていた¹⁰²」とヴァレリに宛てた手紙で書いている。しかし、彼が自己をサンボリストというのは、文学史上の詩のひとつの傾向においてというのではなく、文学的風土あるいは思考方法そのものにおいてであった。右に掲げたヴァレリの手紙の続きに「つまり、マラルメは詩に対して、メーテルリンクは劇に対して（…）そして私は小説に対して自分を加えたい¹⁰³」と彼はいうのである。一体サンボリスムの小説とは何か、それは、彼

の文学が異常なほどに自我主義的であることを考え合わせると、思考方法、生活態度、文学形式のすべてにわたって当てはめられるものだといえるのである。「象徴の理論」という副題を与えられた『ナルシス論』で彼は「真実はフォルムの後ろにある。それが象徴である。すべての現象は真実の象徴である¹⁰⁴」という象徴の理論を述べてはいるが、彼においてはそれも、文学の方法の理論として受けとられるよりもむしろ、自我または自我のモラルの問題として受けとられているのである。彼の作品には、ルネ・ラング夫人が指摘するように『ユリアンの旅』では文学形式としてもなされてはいるが、象徴主義はジッド流に変質されているのである。つまり、「彼の」象徴主義の理論は、自我の深化と観念化、自我と外部社会との分離、という面によりよく説明がつくものである。「真実はフォルムの後ろにある。それが象徴である」というとき、彼は、象徴の名において、観念の深化こそ真実の深化であるとすることができたのである。このようにして、彼の自我は現実社会から分離するに従ってより真実性を増すのである。

フランス・サンボリズムとドイツ観念論との関係は、ラング夫人などの研究家のいうように、たしかに考えられるものかも知れない。しかし、それは別にして、サンボリスムの理論がジッドの自我主義あるいは現実社会との分離の傾向を強めたということはできるであろう。

ふり返って『背徳者』のミッシェルの行動倫理、あるいは

先に進んで「無償の行為」などは、個人と社会との深い断絶がなければ成立し得ない理論である。そして、この断絶を正当化したものは、ジッド固有の強靱な人間性をも含めたそのサンボリスムの理論であると思われとのである。

そのこととは別に、あるいはそれとともに、ジッドが強い影響を受けたのはニーチェやドストエフスキーからである。

彼は一九二二年八月四日の日記に「ニーチェの私に対する影響？…私は彼を発見したときに『背徳者』を書いたのだった」と述べている。また彼は、一九〇八年つまり『背徳者』の六年後に、『ドストエフスキー論』を書いている。ニーチェやドストエフスキーは早くからジッドが好んで読んだ思想家または作家であり、一八九六年頃から一八九八年頃の間には書かれた「覚書」のなかにすでにそれらの名前が言及されている。したがって『地の糧』の主義主義的な自己解放のテーマはある意味でこれらの思想家の影響になるところであるであろうし、「ナタナエルよ！」という呼びかけの後に続けられる主人公の自己解放宣言が詠われる形式は、まさに、ニーチェの『ツアラストウラ』と同じものである。

『背徳者』はジッド自身も指摘しているように、ニーチェからの強い影響によって書かれたものと思われる。少くともニーチェの思想がひとつの契機になったことは確かである。

『背徳者』の主人公ミッシェルは、それがただ「咎めるのでなくまた弁護するでもなくひとつの問題として差したす^④」だけのものであるにしても、「背徳」の思想を公けに示す

ものである以上、強い立場で作者に支えられていなければならない。それは、ジッドの自我の主張、ひとつの「権力意志」の表示と考えられるのである。これは、後に形は変わるが、『法王庁の抜け穴』の主人公ラフカシオが理由なくして殺人を犯す「無償の行為」の思想の遠い基盤となるものとも考えられる。もちろん、そのためには、ジッドの思想そのものが「無償」化、つまり観念化または非社会化、されていなければならぬ。

ジッドがまた、ニーチェやドストエフスキー以外に、ドイツの観念論哲学あるいはドイツ・ローマン主義の影響を受けたことは諸研究家の指摘するところである。この場合の具体的表われは簡単に明らかにされ得ないが、彼の自我の極度な観念化・深化、社会との断絶の形式はそれらの思想から得たものといえよう。L・ラング夫人の研究ではノヴァーリスの文体とジッドの初期作品『ユリアンの旅』の文体との類似が指摘されているし、彼自身しばしば日記のなかで、シヨペンハウエルやフイヒテの名を書きつけている、ということも上述の通りである。思想の観念化、あるいは現実世界そのものを観念操作によって客観化し自己と社会とを遮断する「態度」、はそれらの思想の一面を示しているものといえよう。

ジッドが『地の糧』や『背徳者』と併行して、同じ時期に、『パリュード』や『鎖を離れたプロメテ』を、そして後に『法王庁の抜け穴』といったソチ形式の作品を書いたことは、この自己の反社会化または自己の虚構化を示すものに他

ならない。

『パリュード』などにおけるジツドの文学思想は、一方では自我を戯画化し他方では戯画化された自我によって社会を戯画化するのである。それは現実社会の立場から見た自我の特異性の批判であるとともに、また特異な自我から見た現実社会の批判でもある。ここでは自我は二つに分離し、それらがそれぞれの存在理由を要求しながら、ますます分離して行く形式が示されている。そして、この自我の分裂はジツドの初期の文学のひとつの特質でもあるのである。自我の分裂、自我と社会との分離・断絶が深化するとき、思想の無償性または虚構性が現われると思われる。ラフカジオの「無償の行為」はその極限のものである。

右に述べたジツドの思想的発展は、たしかに、彼の青年時代からの、ドストイエフスキーあるいはドイツの諸思想家の影響によるものであろう。しかしながら、「私がドストイエフスキーもニーチェもXもZもたとえ識らなかつたとしても、やはり私は同じように考えていたであらうと思われる。私は彼らによって教えられたというよりもむしろ彼らのなかにひとつの権威づけを見出したのである^④」とジツド自身がいうように、それは彼自身の思想であつたともいえるのである。あるいは少くとも、彼がそのような思想・態度を持ちうる時代思潮のなかにいたということである。彼は彼の時代の影響を受けながら独自の文学世界をつくり上げたといえるのである。

さらに、一九三〇年前後において、ジツドは急速に左傾する、前にも述べたように、一九三〇年代は彼が彼の主要な文学創造を終えた時期である。したがって、彼のコミニスムへの接近は、彼独自の文学的・人間的追究の後の、ひとつの新しい道への希望を表わしたものであると思われる。「大衆は忌むべきである^⑤」というようである意味で貴族的な自我主義的思想は、長い自我内部のあるいは自我と社会との葛藤の後に、大きく変革されようとするのである。

しかし、ジツドのコミニスムへの方向転換はあくまでも個人の生き方の問題であつて、コミニスムが本来もつている社会変革の問題としては捉えられてはいないのである。後に彼自身が告白しているように、彼は「一生懸命に何ヶ月もマルクスを勉強したりしたが、(…)結局盲目的な熱情にかられていたので本当に何も解りはしなかつた^⑥」ということであつた。彼は、あくまで「個人」の立場からコミニスムに希望をかけそれに救いを求めたのである。だから、一九三四年に発表した彼のマルクスとレーニンへの讃辞も、一九三六年の『ソヴェエト紀行』の「社会主義国の現実」によって、修正されるのである。

それより前、一九二五年のアフリカ旅行による『コンゴ紀行』で、ジツドはフランスの植民地政策を批判するが、それは表面的にはどうであれ、彼の立場としては「圧倒され搾取される黒人」に対する人道主義的同情の立場であり、より広い視野に立つ社会変革の行動の立場ではなかつたといえる。

要するにジツドは、初期の自我の問題から長い遍歴を重ね、最後にその救いとしてコミュニケーションに近づくが、結局、個人の立場を離れることはなかった。この思想的变化または発展は、これもまた、彼独自のものであると同時に、彼が存在した時代のひとつの風潮ともいえるのである。そして、その場合、ジツドは、時代の思潮の発展のきわめて特殊であるとともにある意味で普遍的な典型を示しているといえるのである。

(3) 作品形式の発展の問題

一般に、ひとりの作家においては、作品の内容上の発展は考えられるが、形式——ジャンル——の発展は稀れなことである。小説家も詩を書くことがあり戯曲を書くこともある。あるいはまた、その逆の場合もあり得る。しかし、ジツドのように、われわれが普通「小説」と呼ぶものをさらに独自のジャンル区分で書き分けたということは珍らしいことといえる。しかも、彼の場合、そのジャンル区分は、単なる偶然や気紛れからではなく、彼の文学思想に即応したものであり、さらに彼の思想の発展とともに発展して行くと思われるものである。

ジツドの「小説」に対するジャンル区分は、ソチ soie (あえていうなら、茶番劇)、レシ récit (物語)、ロマン roman (小説) の三つである。もちろん、彼はそのほかに劇作も詩も書いている。しかし、ここで問題にするのは一般に「小説」

と称されるものの内部での形式区分に関してである。過去のジツド研究では、P・ラフィューにしろV・ロッシにしろ、内容に主眼を置き作品形式については重点が置かれていない。しかし、内部からと同様外部からもジツドの作品を見ることは無意味ではなくその意味で彼の作品形式の発展の問題は興味深いものである。

彼の作品には、前期において比較的「ソチ」形式が多く後になって「レシ」形式が多くなっている。そして「ロマン」というのは、少くともジツドがそのように名づけたのは後期の『贗金づくり』だけである。

すなわち「ソチ」と称されるものは『パリユード』(一八九五年)、『鎖を離れたプロメテ』(一八九九年)、『法王庁の抜け穴』(一九一四年)であり、またわれわれがそのように呼ぶものとして『ユリアンの旅』(一八九二年)、『愛の試み』(一八九三年)がある。「レシ」形式のものは『背徳者』(一九〇二年)、『蕩児の帰郷』(一九〇七年)、『狭き門』(一九〇九年)、『田園交響楽』(一九一九年)、『女の学校』、『ロベール』(一九二九年)などであり、処女作『アンドレ・ワルテルの手記』(二八九一年)もそのなかに入るかも知れない。「ロマン」は『贗金づくり』(一九二六年)ただひとつである。

「ソチ」というのは文学史的には中世の演劇ジャンルのひとつであり、「ファルス face」とともに、一種のアレゴリーによって社会を諷刺する茶番劇であった。そこにおいて、

役者は自らを「soft(馬鹿)」と称し、自らを批判しつつ社会をも批判したものである。この形式はもちろんジツドの「ソチ」と同じではないが、小説の世界を戯曲化しつつ自己をも社会をも批判した点において、類似点をもっているといえる。

ジツドの初期においては、前に述べたように、自我の極度の深化とそれに伴って生ずる現実社会との分離、さらに自己内部の分裂が特徴的であった。あるときは、現実社会に属する外的自己は仮像と見られ、また別のときは、それが現実の自己とみられる。このような自我の転回が、前者においては「ソチ」形式の、後者においては「レシ」形式の文学をつくるのであるが、「ソチ」においては、極度に観念化し非現実化した自我を、現実の立場に立って批判しながらも、半面、ジツド固有の特異な自我の立場から現実を批判するのである。そして、この自我の分裂が強くなればなるほど人間の悲劇性が強くなり、さらにそれを客観化した場合に、その悲劇性は喜劇性に変わり得るのである。自我の問題の深刻さを作家として客観視するとき、そこに滑稽味が生じ自らを *grotesque* と見る立場がでてくるのである。『ナルシス論』のなかで「自分をみつめる自分のなかの自分」という自我内部の構造が示されているが、それが「ソチ」形式を生みだすものなのである。

ジツドは一八九三年に第一回のアフリカ旅行をおこない、それにおいて『地の糧』に示されているような「自我と外部世界——または自然との溶合、「不一致な二元主義」の「ひ

とつの調和」を試みたのであるが、『パリュード』はその試みの失敗の後に書かれたものである。彼は極度に深化・観念化した自我をひたび客観視することにより批判し、それと同時に、観念的ではあるが彼の本質であるその自我から現実の卑俗な自己と社会とを批判するのである。『鎖を離れたプロメテ』は、「思想」の重みから解放されて山から街へ降り現実のなかに戻る生活方式のアレゴリーであると考えられ、『法王庁の抜け穴』は、街のなかでふたたびその「思想」を取り戻し、現実とたたかうジツドの像であるといえる。

『法王庁の抜け穴』は『パリュード』から十年後に書かれたものであるが、否定的・諷刺的基調は弱くなり、むしろ肯定的あるいは実験的傾向をもっている。ラフカジオの姿は『パリュード』の主人公の姿のように仮象としてみられる立場から、かなり移行し、むしろ作者の弁解と支持を受けている。しかし、それも、あくまでアレゴリーであり、ラフカジオの行う「無償の行為」もアレゴリーと諷刺の安全弁に入っているといえなくもない。

「レシ」形式の作品は、「ソチ」形式の作品に対して、深刻でかつ直接的に問題を表出している。ここでは、作者の思想または生活態度が、諷刺の対象としてでなく、「物語」の形式をとりながら主張されるのである。この形式は、チボーデが「私的小説 roman personnel」と呼んだまさにそのものであり、またジツドにとって最も適したものであったといえる。彼は「ソチ」形式の作品群の後に、「レシ」形式へと移

るわけであるが、そこにおいて問題を直接に「誠実」に扱うのである。したがって、「レシ」形式の小説の主人公は作者自身の像あるいはその代弁者なのである。

『背徳者』はジッド独自の思想を体现する主人公ミッシュェルの生活を描いたものであり、『蕩児の帰郷』は、やや物語性に欠けるが、自由を求めて家を出、後に失敗して帰って来る兄の姿と、それを知りながらやはり兄と同じように家を出る弟の姿とにより、ジッドの生き方の問題を図式的に示しているものである。『狭き門』は右の二作品とはテーマは変わるが、ジッドのキリスト教に対する態度を、一方では福音書の倫理に献身するアリサの態度と、他方では人間の愛に生きるジェロームの態度とを、かなり芸術的に粹化させながら物語るが、このいずれもがジッドの半身であり、したがってこの作品も自伝のひとつと考えられるのである。『田園交響楽』もつきつめて行けば『狭き門』とは同じテーマかも知れない。ここでは『狭き門』の純粋なキリスト教の倫理への可能性が否定されているように思われるのであるが、しかし、それも作者ジッドのひとつの態度のあらわれであると考えられるのである。

「レシ」が自伝的内容をもつのであるのに対して、彼の「ロマン」は、——少くともジッドの意図では——小説のなかからあらゆる非小説的要素を除いた形式であった。それは、自伝的要素を加えず客観的にひとつの世界を構成するべき小説、彼が贗金づくりの日記のなかで述べているような

「純粋小説」の試みであった。サルトルはN・サロートの『見知らぬ男の肖像』の序文でこの「純粋小説」の試みを評価はしている。しかし、ジッドが実際に行ったものに関してはいえば必ずしも成功したとはいえない。それは、ひとつにはそれに適した形式が見出されなかったこともあり、もうひとつは、それとともにジッドの文学は本質的に作家個人の生活態度から切り離しては成立し得ないものであったからである。今日の「新しい小説」がひとつの「純粋小説」であるとすれば、それはジッドの時代においては不可能なことであったといえる。

ジッドの文学はいかなる場合も彼のモラルの問題から離れて考えることができないのである。そして、彼のモラルの内容は、これまでに述べたように、何よりもまず自我の問題を離れて考えられないのである。だから、彼の作品の形式は外面的には様相を変えていても、つねに彼の人間が問題にされているのであり、逆に、彼の人間の発展が作品形式の発展に応じて変化したともいえるのである。

(註)

1 Hommage à Gide: La Nouvelle Revue Française, 1952,

12.

2 ジッドが少年期から Onanisme の性向があり、後に

Sodomiste であつたことは知られている。

3 Léon Pierre-Quint: André Gide, sa vie, son oeuvre (Stock) 1933, P. 14

4 André Gide: Oeuvres Complètes (Gallimard) Tom. I, Cahier d'André Walter, P. 75.

5 André Gide: Journal (Pléiade) P. 19, 1891, 6, 10

6 André Gide: Oeuvres Complètes, Tom. I, Cahier d'André Walter, P. 73

7 André Gide: Oeuvres Complètes, Tom. II, Les Nourritures terrestres, P. 86.

8 André Gide: Oeuvres Complètes, Tom IV, L'Immoraliste, PP. 16~17

9 Ibid., P. 63

10 Ibid., P. 65

11 Ibid., Préface.

12 André Gide: Oeuvres Complètes, Tom. III, Lettres à Angèle P. 199

13 André Gide: Journal, p. 36, 1893, 5, 28.

14 André Gide: Journal, P. 19, 1891, 6, 10

15 André Gide: Oeuvres, Tom. I, Cahiers d'André Walter, P. 172.

16 Ibid., P. 32

17 André Gide: Oeuvres Complètes, Tom. II, Nourritures terrestres, P. 95.

18 Ibid., P. 165

19 André Gide: Oeuvres Complètes, Tom. IV, L'Immoraliste, P. 6

20 Gide-Valéry, Correspondances; Lettre à Valéry, 1891, 1, 26

21 Ibid.,

22 André Gide: Oeuvres Complètes, Tom. I, Traité du Narcisse, P. 215

23 André Gide: Journal, P. 739, 1922, 8, 4.

24 André Gide: Oeuvres Complètes; Tom IV, Préface

25 André Gide: Journal, p. 738, 1922, 8, 4.

26 André Gide: Oeuvres Complètes, Tom. III, Lettres à Angèle, P. 191.

27 アンヌ・シムル「自作を語る」片岡美智訳編 (田黒書店) 一水房賞

28 André Gide: Oeuvres Complètes, Tom. I, Traité du Narcisse, P. 214.

29 André Gide: Si le grain ne meurt, II, 1.

IV

以上述べたことは、アンドレ・ジイドの文学に対する判断でもなく、またひとつの見方を示したものでもない。それは、それ以前の問題として、われわれがジイドの文学を見直さねばに必要な観点を示しただけにすぎない。

ジイドの文学ほど正確に捉え難くその思想の道筋を解明し難いものはないように思われる。それは、彼の文学または思想が、その内部で、彼自身も説明できないほどに、ある意味で矛盾し合い価値が転換し合っていることのために、われわれ

れ自身もそのなかにひき込まれ客観的な見方ができなかったからにほかならない。しかし、ジツドは時代の推移とともに遠ざかり過去に位置づけられようとしている。あるいは位置づけられねばならないのである。

ジツド研究は、彼の同世代、彼の死の時期、そして今日、というように進んできた。それぞれの時代はそれぞれの見方がありそのいずれも否定できない。われわれは今後ジツドを読みあるいは研究するに当って、これらの各時代の批評・研究からそれぞれの利点をひきださなければならぬ。

ジツドの文学は本質的に自我の文学である。その主義は作品形式の面においても表わされている。したがって、作品のいわば芸術的・美学的な面においても彼の人間の問題は無視できないと思われるのである。それは、しかし、一九五〇年代までのジツド研究には見られなかったことであり、最近になって始められたもののように思われる。もし総合的なジツド研究が行われるとすれば、それをも含めたものとならなければならぬ。だから、今後のジツド研究は、彼の人間、時代背景（社会・思想）、作品形式などを含むものとなるであらう。

文学史的にいつても、彼の出発はサンボリスムからであり、二十世紀前半を経て、その思想面においてもまた小説形式の面においても彼の文学は現代と深いつながりをもつものである。この場合、われわれは直接彼の文学を現代に結びつけることができないにしても、間接にあるいは彼の時代のひ

とつの典型として考えることによりその意味づけを行うことができるのではないかと考えられるのである。そして、ここでは、そのひとつの見方の断片を略述したにすぎないのである。